



ドクターの肖像

関野晴夫

関野晴夫ほど医師免許という国家資格を自在に使いこなして一度きりの人生を破天荒に謳歌してきた医師は珍しい。飄々として人生達人の風情がある関野の半生を聞いていると、自由な風が吹くのを感じる。簡単に、関野の人生を振り返ってみよう。

関野は、敗戦が押し迫る1945年3月5日、千葉県市川市に生まれた。母親は、父親の仕事の関係でインドネシア生まれ。関野のグローバルな生き方のルーツはそんな家風にも一因があるのかもしれない。関野は男ばかりの4人兄弟の次男で、長男は父親の会社を継ぎ、三男は歯科医になり、四男はJALのパイロットになった。関野は、若い頃から海外への関心があったのだらう。高校3年の8月から米国の奨学金をもらい約1年間ミネソタ州の公立高校に留学した。帰国後、受験勉強をする間もなく、



どうせ落ちるだろうと思いついた東京医科歯科大学歯学部合格。とりあえず入学はしたものの、「口の中だけを見るのは性に合わない。どうせなるなら医者になろう。でも、遅れついでに色々回り道してから30歳までに医学部に入学しよう」と、すぐに中退した辺りいかにも自由人の関野らしい。

同時通訳の学校に通った後、実社会でも苦労してみようと考え、偶々新聞で募集していたエールフランス航空に入社し、貨物課に配属された。3年間働いて退職したが、その間、9割引きの値段で同社の飛行機を利用できたので、ヨーロッパにスキー旅行に行ったり世界中を旅して回った。

そして、当初の予定通り29歳の春、関野は横浜市立大学医学部に入学した。医学部時代も、医学の勉強の傍ら、専門家の視察団に通訳として雇われ、国際学会や現地視察等で、リスボン、イギリスのエジンバラ、ドイツのシュトゥットガルト、アメリカ等に帯同したりもした。

医学部時代の重要な出来事とし

隊を派遣する時期と重なり、日本に残している家族の気持ちを考え、7年間の大使館勤めに終止符を打つことにした。

日本に戻ってきた関野が次に選んだのは、つくば市にある大見病院肛門科での外科医としての仕事だった。しかし、関野がここで5年間勤めた頃、痔は手術ではなく注射で治す時代に大きく変わってきていた。病院の経営は悪化。関野は、潮時と思いつきの職場を探すことにした。

関野が選んだのは、平戸市国民健康保険大島診療所という、長崎県平戸市の離島にある唯一の医療機関の一人所長という仕事だった。関野は64歳になっていた。選んだ理由は、「九州地方に行ってみたいと思いついてきたところ募集があったので応募したら採用された」ため、特に僻地医療に使命感や関心があったとかではない辺りも関野らしい。ちなみに大島の人口は、関野の赴任当



時は1,500人ほどいたが、今は1,000人を切っているとのこと。仕事も、一人診療所長とは言え、



左端 関野晴夫

て、結婚がある。ダンス部の合同練習で知り合った短大生の妻は結婚当時19歳。関野は31歳。お互い、まだ学生であった。関野によれば、「毎日の電話代がかさむので、いっそ結婚して一緒に暮らすことにした」。両家の親からも反対はなかったらしい。その後、関野が40歳を超えてから、夫婦は2人の男子を授かることになるが、それもまた関野の人生を大きく動かすことになる。

医学部を卒業した関野は、米海軍横須賀地域医療センターを皮切りに、横浜市立大学医学部第一外科、平塚共済病院、神奈川県立足柄上病院、社会保険相模野病院で外科医として研鑽を積み、外科認定医も取得したが、そのまま外科医として終わらないのが関野流の生き方。

関野が次に選んだのが、三井生命保険相互会社医療部という職場であった。あっさり×



ずっと島にへばりついている必要はなく、週末には九州をあちこち旅して回った。関野は、とにかくじっとしていることのできない自由な風のような男なのだ。月に1回だけ妻のいる自宅に帰るこの生活を15年間続けた。

そして、2024年4月、79歳の関野は、様々のユニークな経験を携えて、我々の慈恵会洞爺湖温泉診療所に所長として赴任してきた。理由を聞くと、妻が弘前をいたく気に入って、北の方の仕事を探していたら、慈恵会の応募が目止まったとのこと。関野は、自由奔放に生きているように見えて、実はそれぞれの選択の裏に見え隠れしているように家族のことを関野なりに考えているのである。妻とは今でも毎日のように長い時間、電話で話をしている。そう言えば、結婚を決めた理由は長電話の電話代だった。嬉しいことに、結婚をした頃とは違い、今は何時間電話しても料金は同じだ。



大使館時代

(文章:岡本拓也)



時間と体力を惜しみなく家庭に注ぎ、関野はマイホーム

パパ時代を過ごした。

語学が堪能な関野が次に選んだのが、外国大使館の医師という道。8年間勤めた保険会社の仕事には飽きてきていたし、次男が小学校に入學し手がかからなくなってきたので子供たちのことは妻に任せてそろそろ好きに生きてもいいかな、と関野は思い、妻も夫の選択を受け入れてくれた。外務省医務官・駐ブルガリア日本大使館1等書記官というのが52歳で新たな一歩を踏み出した関野の大使館勤めの最初の肩書。その後は、駐ヨルダン日本大使館、駐カボン日本大使館を歴任し、次の赴任地が東ティモールと聞かされたが、おりしも日本がPKO協力法に基づいて陸上自衛